

編 集 後 記

消化器，内視鏡，癌その他の国際学会において多数の研究結果が発表され，日本の消化器病学，特に早期胃癌の診断学が世界をリードしていることが内外の諸学者に等しく認められたことは誠によろこばしいことである。しかし一方，外国学者の発表を聞き，また親しく話し合って一，二感じたことがある。彼等がそれぞれ自身自身の学問に自信と誇りを持ち，私どもから見ると，少しく時代遅れではないかと考えられる方法でも自家薬籠中のものとして，その特徴を充分発揮し良成果をあげていることと，他人のオリジナリティーというものを尊重し，しかも自分自身で充分納得しない限り新しいからといって，徒らにとびつかないことである。この点新しがりやの日本人にとって反省してみる必要はないであろうか。流行を追うことのみ熱中せず，まず自分自身のものを伸ばすべきである。これがひいては人の仕事を尊重し，それを正しく評価し，消化吸収することにもなると思う。学問の世界におけるオリジナリティーというものはもっと厳しくあってよいと思う。

本号は粘膜下腫瘍の特集号として，そのX線，内視鏡及び細胞診断と，これに関する座談会記事を掲載し，シリーズものの胃潰瘍の座談会は治療問題に入った。

本誌も発足以来9号を重ね，この方面の専門誌として研究者や実地医家に干天の慈雨の如くむかえられつつあるが，今後更に飛躍的な発展をするためには，更に多数の読者と，幅広い層の積極的な参加が望まれる。

< 春日井達造 >